

諦めて身を引いたのに、エリート外交官に
お腹の子ごと溺愛で包まれました

番外編

運命ならばまた必ず出会えると信じていた

目 次

諦めて身を引いたのに、エリート外交官に
お腹の子ごと溺愛で包まれました

諦めて身を引いたのに、エリート外交官に
お腹の子ごと溺愛で包まれました

プロローグ

十一月中旬、彼氏に高級ホテルのディナーに誘われた。

彼氏の弘樹^{ひろき}とは、初めてフランス料理のコースをいただく。美しい盛り付けと香りに包まれた料理は、まるで芸術作品のようだつた。

「今日はディナーに招待してくれてありがとう。明日で三年目だもんね」

ソムリエのおすすめワインを一口飲んだあと、弘樹に感謝の意を伝えた。

彼の笑顔を見るたび、私の心は温かくなると共に彼との思い出の数々が蘇^{よみがえ}つてくる。

私、吉野明莉^{よのあきり}と彼が付き合って、明日で三回目の記念日だ。

一緒に過ごしたこれまでの時間を振り返ると、幸せな瞬間がたくさんあつた。

今日は一日早いが、当然のように記念日のディナーだと疑わなかつた。

「そのことなんだけど……いや、食事が済んでからでいいや」

「え？」

そう問い合わせると、弘樹は「とりあえず、食事を楽しもうよ」と微笑んだ。

心臓が一瞬止まつたように感じた。何故か、彼は言いにくそうにしているから。

もしかして、これからプロポーズされるのかも……？
そう思うと、胸がドキドキと高鳴つた。

弘樹は真剣な眼差しで私を見つめ、少し緊張した面持ちで口を開いた。

彼の口から紡がれる言葉を待つ間、私は期待に胸を膨らませ、この瞬間が永遠に続けばいいのにと願つた。

ところが、次に耳にしたのは、まつたく想像もしていなかつた言葉だつた。

「明莉のこれから夢つて何？」

突然、弘樹が真剣な眼差しを向けてきた。

いつになく鋭い目を向けて話す彼のその問いかに、私は一瞬戸惑つてしまふ。

「これから先の未来は、明莉の答え次第だよ」

先程とは打つて変わつて、何となく嫌な予感がしてきた。

プロポーズをしてくれるのかもしれないが、何か言われそうで思わず身構えてしまう。

私はずつと、日本と海外を行き来する仕事をするのが夢だつた。

あまり考えないようにしていたけれど、弘樹は元々、私の夢にはあまりいい顔をしていなかつた。

その夢がつい最近、軌道に乗り始めたのに、諦めなきやいけないのかな……。

結婚という幸せも手に入れたいが、せっかく叶つた自分の夢も失いたくない。どちらも同じぐら

い大切だと思つてゐるから。

「そうだなあ？ 私は……」

動搖を悟られないように明るく振る舞おうとするものの、言葉が上手く出てこない。

彼の期待に応えたい気持ちと、自分の夢を守りたい気持ちが交錯する。

「俺の夢はね、幸せな家庭を築くことなんだ。子どもは多ければ多いほど楽しいだろうし、自分が養うから奥さんは働かなくていい。とにかく、奥さんと子どもたちみんなで俺の帰りを待つてくれるような温かい家庭にしたい」

その言葉を聞いて、私は胸が締めつけられる思いだつた。

「え……」

弘樹が思い描く未来は、私が望んでいるものとは違う。

家庭に入つて家族を支えることも立派な仕事だし、それが自分の幸せだという女性もいるけれど、私は仕事も続けたいの。

彼が私の夢を好ましく思つていないことは知つていたけど、それでもここまでハッキリと、結婚したら働かずに家庭に入つてほしいと言わるとショックだつた。

思つてもいなかつた複雑な気持ちが湧き上がり、胸を締めつける。

「そろそろ俺も結婚したいんだ」

彼の言葉は、私の心に重くのしかかつてくる。

「うん、私も結婚したいよ。でも……」

心の中で葛藤が生まれてくる。

仕事は辞めたくないの——この言葉を伝えてしまうと、私たちの関係はきつと終わつてしまふ。

彼とのこれからを想像するのが怖かつた。

「分かってるよ。明莉は仕事を続けたいんだよね？」

「うん。続けたい」

もしかして、弘樹は私の夢に歩み寄ろうとしてくれていてるのかもしれない。

ほんの僅かな希望が、胸の奥で芽生えるのを感じた。

ところが、次の瞬間、非情にもその希望は打ち砕かれた。

「だからさ、明莉は自分の思い描く道を進んでよ」

そう言つた彼の声には何か冷たい響きがあつた。

「……どうしたこと？」

「つまり、明莉は俺の結婚相手には相応しくないってこと。子どもが生まれてからも、バイヤーとしてに海外に行かれたら困るんだよ。子どもの面倒は誰が見るの？」

一瞬でも、弘樹が私の夢に歩み寄つてくれるかもしれない期待してしまつた自分が情けなかつた。

彼の言葉は、私の心を打ち碎くには十分すぎるほど、冷たく重かつた。

幸せな家庭を築きたいと語つていた彼の言葉は、まるで上辺だけのものだつたのだと突きつけられたようだつた。

『子どもの面倒は誰が見るの？』という言葉は、家事も育児も全て私任せにするという彼の本心を物語つている。

こんな考えの彼とは、たとえ私が仕事を辞めて専業主婦になつたとしても、幸せな家庭を築くことなどできそうにない。

自分に都合の良い理想ばかりを語る弘樹の姿に、私はすっかり幻滅していた。こんな自己中心的な人と、これから先の人生を共に歩むことなどできない。彼のことはすでに、目の前の私とは向き合はず、自分勝手な理想の家庭像を押しつけているだけの小さな男にしか見えなくなつていた。

「彼との未来を、私はもう望まなかつた。」

「奥さんの役割は、ご飯を作つたり子どもの面倒を見たりするだけじゃない。そもそも、子どもは一人で育てるものなんだよ。私も働きたいから専業主婦になるつもりはないけど、仮にそうなつたとしても家事や育児は二人で分担すべきことだと思ってる。だから、弘樹がそんな考えなら、私は無理」

弘樹に対して怒りが湧くよりも、呆れと幻滅が心を支配した。

三年近くも一緒にいて、こんなにも自分のことしか考えていなかつたのかと思うと、それに気付かなかつた自分が悔しく、そして虚しくなつた。

私は自分の思いをぶつける。

「心の中で、彼との関係が崩れゆく音が聞こえた。」

「俺の方が無理だよ。今日で別れよう」

彼のその一言で、明日で三周年という私たちの関係は幕を閉じた。

「……うん」

その瞬間、心の奥に新たな決意が芽生えた。

きっと、これでよかつたんだよね。

新たな一步を踏み出す準備ができた気がした。

私は自分の道を選ぶことを決意する。

どんな困難が待ち受けていても、私の人生は私が作る！

飛行機の窓から見える雲を眺めていると、ふわふわとした白い塊かたまりに吸い込まれてしまいそうだ。雲の隙間から差し込む光は、私の心の奥底に潜む希望を微かに照らすものの、振られた彼のことばかりが頭を駆け巡り、胸が締めつけられる。

思い出は甘く、どこかほる苦い。

中学生の時にオーストラリアでのホームステイを経験したことを機に、世界中を飛び回る夢を抱いた。

大学で英語を学んだ私は、卒業後の進路に悩んでいた。英語力を活かせる仕事として、元々は外交官に憧れがあつたものの、それはあまりにも遠い夢のように感じられる。

華やかな世界とは縁のない、ごく平凡な家庭に育つた自分には到底手が届かないだろうと、無意識のうちに諦めてしまっていたのだ。

商社や外資系企業で働くという選択肢も頭をよぎったが、もつと自由に、自分の“好き！”という気持ちを大切にしながら、世界とつながりたい。そう考えていた矢先、幼なじみであり親友の東郷美緒とうごうみおが輸入雑貨店を立ち上げると聞き、迷うことなくバイヤーになることを決めた。

幸いにも自分の“好き”を仕事にできた私は、夢中で働いた。

仕事が軌道に乗り始め、やつと夢が叶つたと思つていた時、弘樹との別れが訪れた。

もしあの時、私が彼の望む“専業主婦”という選択をしていたら、今の私はどうなつていただろうか。

そのあと彼との結婚生活が幸せなものになつたかと言えば、そうは思えない。

自分らしく生きることを諦めてまで手に入れる結婚に、きっと私は安らぎを見出せなかつただろう。

だからあの時、自分の気持ちに正直になつてよかつたのだ。

ただ、そう思つてはいても、約三年間も一緒にいた彼との関係を、あつさりと間違いだつたと割り切れるほど、私の心は強くなかつた。

深い溜息が、私の胸の奥に渦巻く複雑な気持ちを物語ついていた。

これからフィンランドでの買い付けに出かけるというのに、気分がまつたく乗らない。

いつもなら、到着が待ち遠しく、わくわくしながら飛行機に乗つてているというのに……

窓の向こうには無限の空が広がり、私の心を取り巻く雲もその一部なのに、何故かその美しさに心が癒やされることはない。

心の中のモヤモヤが晴れることはないまま、私は再び窓の外を見つめる。飛行機を乗り継いで目的地の空港に着くと、落ち込んだ気分のままフラフラと歩いていた。

周囲の活気ある雰囲気も、私の心には届かない。

13 諦めて身を引いたのに、エリート外交官にお腹の子ごと溺愛で包まれました

楽しみにしていたフィンランドの地にいるというのに、心はどこか別の場所にあつて、彼との別れが頭を離れなかつた。

「……きやつ！」

不意に、すれ違つた誰かが私にぶつかつてきた。

驚きと戸惑いの中、ぶつかられた衝撃で私はよろめきキャリーケースが倒れそうになり、足がもつれで転んでしまつた。

「痛つ」と思わず声が漏れる。だが、相手はそしらぬ顔で通り過ぎて行つた。

急いでいたにしても、謝りもしないなんて、酷すぎる！

転んだ拍子に、ロングスカートの裾がめくれ上がり、厚めのタイツを履いたふくらはぎが丸見えになつてしまつた。

周囲の視線を感じ、恥ずかしさに顔が赤くなる。

肩掛けバッグの中身もほとんど外に出ててしまい、化粧品が入つたボーチ、パスポートが目の前のフロアに転がる。

私は一体、海外まで来て何をしているんだろうか？

彼とのつらい別れを乗り越え、自分らしく生きるために前向きに過ごしたいのに、私は結局、彼のことを心の底から忘れられていなかつた。

異国之地で一人、感傷に浸つて無様で惨めな姿を見せてはいる自分が情けなくて、目尻に滲む涙を拭うこともせず、私はただそつと目を閉じた。その時――

「大丈夫ですか？」

体勢を整えようとしている、見知らぬ男性の声が頭上から降つてきた。

声のした方向を見上げると、そこには高身長のイケメンが立つていて。

その男性の整えられた綺麗な黒髪と端正な顔立ちに思わず惹きつけられてしまつた。長い睫毛の奥の瞳は真っ直ぐに私を見つめていた。

一瞬、状況を忘れて見とれてしまいそうになる。

みんなが素通りする中で私に声をかけてくれ、手を差し伸べてくれた。

その所作は優雅でどこか気品があり、普段なら声もかけてもらえないような存在に思えた。

落ち込んでいた気持ちが少しだけ晴れた気がする。

彼の表情は優しさに満ちていて、私の心の痛みを少しだけ和らげてくれる。

「あ、ありがとうござい、ます……！ 大丈夫、ですか？」

手を差し伸べられても、見知らぬ男性に触れるわけにはいかない。

私は慌てて、散らばつたバッグの中身をかき集めた。

焦りが心を乱し、手が震えているのが分かる。

周りの視線が気になり、恥ずかしさも混じつていた。

「このポーチも落とされた物ですか？」

彼が優しい声で訊ねてきた。彼の声は、私の不安を少し和らげてくれる。

「そうです」

彼がポーチを拾つて手渡してくれた時、肝心の物がないことに気付く。

「あれ……？　どこにいつちやつたのかな？」

見える範囲に落ちていた物は拾い集めたのだけれど、財布が見当たらない。さっきまでは近くにあつたはずなのに……

周りを見渡しても、落ちている気配はなかつた。

私の顔は、みるみる青ざめていく。まさか、あの時ぶつかつてきたのはスリ？

「どうしました？」

目の前にいるイケメンの彼が、心配そうに話しかけてきた。その優しい眼差しが、ますます私の心をざわつかせる。

「財布がないんです……！」

声が少し震えてしまい、彼の表情が驚きに変わる。

「え？　それは困りましたね」

他の物は全て拾い集めたのに、財布だけが消えてしまつた。

フィンランドに来たのは、クリスマス雑貨の買い付けのためだ。

わくわくしていたはずなのに、今は不安が胸を締めつける。

個人の買い物ではないので買い物自体は財布がなくとも可能だが、滞在中の飲食費など個人的に必要な支払いをどうすればいいのか分からない。

「ひとまず、クレジットカードは利用停止にして、悪用されないようにしましょう」

彼は落ち着いてアドバイスしてくれる。その言葉を聞いて、少しづつ頭の中に冷静さが戻つてくる。

「はい、そうします」

私の頭の中は真っ白に近いが、この男性のおかげでやらなければならぬことが少しづつ浮かび上がつてくる。不安でいっぱいの中、彼の存在が心の支えになつていた。

「俺でよければ力になりますよ」

「え？」

思わず驚いてしまう。

彼も目的があつてフィンランドに来ているはずで、同行者もいるかも知れないのに……

「あ、不審者ではないですよ？　日本から旅行に来た宮原絢斗^{みやはあやと}と言います。俺はオーロラを見るのが目的で、他に特にこれといった用事はないんです。なので、よかつたら俺を頼つてください」

彼はそう言つて、穏やかな笑顔を見せた。

宮原絢斗さん、か……

しかし、こんなにも親切にしてくれるなんて、何か裏があるのかな？　と不安が胸をよぎる。

もしかして、財布を盗つた張本人なのではないか？　元彼の苦い記憶もあつてか、どこか疑心暗鬼になつてしまふ自分がいた。

「ふふ、心配しなくても大丈夫ですよ。俺が不審者かもしれないと疑つてますよね？」

彼の言葉には、どこか余裕が感じられた。疑いの気持ちが、顔に出てしまつていたのかもしれ

ない。

「いえ、そんなことは……」

思わず口を滑らせる。

ごめんなさい、少しだけそう思っていた。

だって、こんなにイケメンな彼が、鈍臭い私に親切にしてくれるなんて滅多にあることじやないもの。

心の中で葛藤が続く。

彼の親切が本物なのか、それとも何かの罠なのか——
「ここで会えたのも、何かのご縁なので、よければ頼ってください。あ、でも、そんなに頼りにならないかもしないですが……」

その瞬間、宮原さんの目が私をじっと見つめているのに気付く。

彼の眼差しには温かさが溢れていて、私の不安を少しずつ溶かしていく。
心中で疑う気持ちと信頼したい気持ちとがせめぎ合っていたが、困っていた私に迷わずに手を差し伸べてくれた彼が酷いことをするはずなんてないだろう。

「本当に助かります……」

素直に宮原さんの申し出を受け入れてもいいんじやないかな?

もしかしたら、信じてみる価値があるかもしない。

心の中の不安を押しのけながら、私は彼の助けを借りる決意を固めた。どのみち、彼に頼るしか

ないのだけれど……

「いえいえ。俺も貴方のお名前を伺つてもいいですか?」

「はい、吉野明莉と申します」

「吉野さんですね。俺のことは宮原でも絢斗でも、好きなように呼んでください」

「私たちちはお互いの名前を明かしたあと、この場から移動することにした。

「まずは空港内の遺失物サービスに届け出をして、警察にも紛失届を提出しに行きましょう。それから、ヘルシンキにある日本大使館に行つて相談してみましょうか」

「……はい」

宮原さんはテキパキとアドバイスをしてくれる。その声は落ち着いていて、まるで心の中の不安を掻き消してくれるような力強さがあつた。

海外には何度も来ていて、紛失や盗難の対処法も把握しているつもりだつたが、いざとなると頭が真っ白になつていた。

私一人では不安で、すぐ行動に移せなかつたかもしれないが、宮原さんがいてくれたことでぐに解決できたと思う。

「あと、クレジットカードですね。利用停止の連絡を入れなくてはいけません」

大切なものを失つてショックを受けている中、宮原さんの的確な指示が私を救つてくれる。クレジットカード会社にはすぐに連絡を入れ、利用停止にした。

旅行に必要ではないカード類は自宅に保管していたため、それだけでも難を逃れたことに安堵

する。

それから、宮原さんと一緒に警察に向かい、紛失届を出した。

フィンランドは以前にも来ているとはいえ、警察署に出向いたのは初めてだ。

私が緊張しながら説明している間、宮原さんは後ろから見守るように立つてくれる。

次に、ヘルシンキにある日本大使館にも出向くことになり、万が一の時には日本から送金してもらえるサービスも利用することにした。

免許証は財布とは別にしていたため紛失せず、家族に連絡をして送金サービスを受けられた。

「あ、あの……宮原さんって……？」

日本大使館でのやり取りを見て、疑問に思ったことがあった。

「はい、名刺です」

差し出された名刺を見て、私は驚く。

日本大使館で名刺を交換する姿を遠目に見ていたけれど、あの時初めて会うはずの相手と、まるで旧知の仲のようにスマーズにやり取りをしていたからだ。

たしかに、只者ではないとは思っていたけれど……！

「実は……外交官です。もしかしたら転勤になるかもしないので、その前に休暇をいだいてオーロラを見に来ました」

真っ直ぐに私に視線を向けている宮原さんの目は、仕事に対する誇りが宿っているように見える。まるで、どんな困難にも立ち向かう勇気を与えてくれるような、そんな印象を抱いた。

「え？ そうなんですね！ だから、あんなにスマーズに対応していただけなんですね」

私は感激してしまい、声が甲高くなってしまう。

私自身、嬉しさが隠しきれず、心が弾んでいるのが分かる。

私の夢の職業だった外交官。身近にはいないので思わず興奮してしまう。仕事のいろんなお話を聞いてみたいな。

「スマーズかどうかは分かりませんが、お役に立てて光榮です」

宮原さんは照れくさそうに笑う。その笑顔を見ると、私の心も温かくなる。

憧れていた職業の人と知り合えるなんて、夢のようだ。

同じ海外で働く仕事をする共通点に親近感が湧いてくる一方で、少し緊張も感じる。

「あの……、このあとのご予定は？」

私は恐る恐る聞いてみた。

せめてものお礼に食事をご馳走したい。同時に食事を楽しみながら、仕事やいろんな国の話を聞けたら最高だと思つた。

「特にないです。ホテルの予約と飛行機の予約以外はノープランで来ちゃいましたから。オーロラは見てから帰りたいとは思つてますが……」

彼の無邪気な答えに、私の心がほつとする。

「もしも、宮原さんがよろしければ……ですが、今日のお礼にお食事をご馳走します。いかがでしようか？」

「え？ お礼だなんて、とんでもないです。でも、俺も一人旅なので一緒にできたら嬉しいです」
その言葉に、私の心は一瞬跳ね上がる。憧れの外交官、しかもこんな親切なイケメンと一緒に過ごせるなんて、まるで夢みたい。

「ええ、是非」

返事をした瞬間、胸が高鳴る。

私たちはフィンランドの首都、ヘルシンキにあるおすすめの店に向かうことにした。街の景色が目に映る中、宮原さんとの会話が楽しみで仕方ない。

心の中で期待が膨らんでいくのを感じながら、私は歩を進めた。

フィンランドに到着した当日は買い付けには行かず、残り時間は自分のために使うと決めていた。

今回は財布の紛失によつて自由時間が大幅に失われたけれど……

夕食は、初めてフィンランドに買い付けに来た時に、雑貨屋さんの店主におすすめされたお店にするつもり。

そのお店はブッフェレストランで、フィンランド料理が思う存分食べられる。

扉を開けるとフィンランド語で「いらっしゃいませ」と言わされて、席を案内された。

港町の雰囲気が漂う店内は、いつ訪れても活気が溢れている。

木製のテーブルや椅子が並び、壁には地元のアート作品が飾られ、どこか温かみを感じさせる。人々の笑い声や会話が飛び交う中、色とりどりの料理が並ぶブッフェスタイルのカウンターが座席から見渡せた。

私たちは気になる料理を皿に盛り、再び席に座つた。

「トナカイの肉を初めて食べました。臭みがなくて柔らかいんですね！」

宮原さんは食事を楽しみながら、興奮気味に話を始めた。

「私も初めて食べた時は驚きました。サンタの国なのに、トナカイを食べちゃうんだつて……でも美味しいですよね」

私たちは冷たく泡立つビールを手に、トナカイの煮込みを頬張る。皿には、鮮やかなオレンジ色のサーモンの塩漬けや、クリーミーなマッシュポテトが盛られていた。

「実は、フィンランドに初めて来たんです。一人旅だったので、どこにしようかな？ って迷つていたのですが、サンタの国に行つてみたいと思いました」

少し恥ずかしそうに言つた宮原さんの顔には、旅への期待が滲み出ている気がする。

サンタクロースの国がフィンランドということは子どもの頃から知つていたが、実際にその場所を訪れるのは簡単ではない。

お金は工面できても、仕事をしていると、まとまつた休みが取れなかつたりするから。私はバイヤーとして、運良く来られただけ。

フィンランドには仕事で来たのが初めてだつたが、目の前に広がる美しい風景や、優しい人々に囲まれ、ここが本当に素敵な場所だと感じている。
「子どもの頃はサンタの存在を信じてましたからね。いつしかいないのかな？ つて薄々気付いたやつたけど……」

少し寂しそうな表情を浮かべる宮原さん。子どもの頃の無邪気な思い出が心に蘇る。

サンタクロースに夢を託し、クリスマスを心待ちにしていた日々が、まるで遠い昔の話のように感じられた。

「いや、サンタさんは実在しますよ。ほら、見てください！」

私はスマートフォンでネット検索をして、画面に表示された公認サンタクロースの記事を宮原さんに見せる。

「公認サンタクロースには厳しい試験があるそうです。合格すれば宮原さんもなれますよ」

私が説明すると、宮原さんの目が輝き始めた。

「本當だ！」 いなだなんて決めつけて申し訳なかつたです

「いえいえ。ボランティアみたいな職業なので無償みたいです」

子どもたちに夢を与える役割のサンタクロースの存在が、どれほど特別であるかを思い巡らせる。

「そうなんですね。それでもやつぱり、サンタが大好きな人にとつては憧れなんだろうなあ」

宮原さんは興味深そうに記事を読みながら、微笑む。

「でも、サンタさんの話をしながらトナカイのお肉を食べちゃうだなんて……何だか罪悪感がありますよね」

「それは言わない約束でしょ」

宮原さんがそう返して、私たちは苦笑いをした。

「明日なんですが、吉野さんのこのあとの予定はどんな感じですか？」

私は突然の質問に驚き、「え？」と思わず声を漏らした。

「すみません、驚かせちゃいましたよね。もしも……もしもですよ？」 吉野さんが嫌いやなれば、買い物付けについて行つてもいいですか？」

「ええ、もちろん！ このお店を紹介してくれたご夫婦が経営する雑貨屋さんに顔を出す予定です」

私は胸を躍らせながら即答した。

宮原さんは会つたばかりなのに、私はさつきまで感傷に浸っていたというのに、今こんなにも楽しい時間を過ごせているなんて……

「今日はご馳走様でした。結局、宮原さんにご馳走になつてしまつてすみません」

「いえいえ、明日から同行させていただくので、せめてものお礼です」

ブッフェレストランを出た私たちは、お互いにお礼を言い合つた。

ピンチを救つてくれたお礼として、私がご馳走するはずだつたのに、宮原さんが支払つてくれたことに何だか申し訳ない気持ちがある。

宮原さんの優しさに胸が温かくなる一方で、今後どうにかしてお礼をしたいと考えていた。

「ツアーも申し込まず、ノープランで来てしまつて……どうしようかと思つてているところに、吉野さんにお会つて助かりました。明日からも楽しい旅行になりそうでよかったです」

「ふふ、実は私、来る前に落ち込むことがあつて、一人でどんよりとしてました。でも、宮原さんに会えて少しづつ元気になつてきました。明日もよろしくお願ひいたします」

「こちらこそ」

お互に自然と笑みがこぼれる。何気ない会話の中に、小さな絆が生まれているような気がしていた。

「吉野さんの宿泊先はどこですか？」

「私はこの近くなんです。宮原さんはどの辺ですか？」

「海が見える客室がいいなと思って、ネットで探したこのホテルにしました」

宮原さんはスマートフォンの画面で、宿泊先のホテルの概要を見させてくれた。

オーシャンビューでスパもあるラグジュアリーなホテルの情報を見て、思わず目を奪われる。

「わあ……！ 素敵なホテルですね。私は毎回おなじみのホテルなんですね」

初めて買い付けに来た時に泊まつた、そのホテルが今でも私の定宿だった。

初めてのフィンランドは美緒と一緒に訪れた。

二人で過ごした思い出が甦り、あの頃の旅行気分が懐かしく感じる。親友との思い出が心を満たし、再び旅のわくわく感が高まっていく。

「毎度おなじみっていうのも安心感があつていいですね。食事もしたし、部屋に戻つても風呂に入つて寝るだけなんで宿泊先まで送りますよ」

「え、でも、すぐ近くなんですか……」

「吉野さんがまた事件に巻き込まれても心配なので、送らせてください。あ、決して、送り狼とかじゃないんで！ そこは誤解なきようにならねえ！」

宮原さんが慌てて否定をしている。その様子が少し可笑しくて、私は思わず微笑んでしまつた。宮原さんが送り狼になるような人ではないと信じている。

「ふふっ、安心してください。宮原さんはそんな風には見えませんよ。じゃあ、お願ひしようかな」

「はい、お任せください！」

明日も会う約束をしているのに、何故だか離れたくない気持ちが湧いている。

宮原さんは今日会つたばかりで、友達と呼ぶにはまだ早すぎる存在。でも、ただの知り合いとうわけでもなく……カテゴリー分けをするならば、『恩人』かな？

心の中で、宮原さんとの距離が少しづつ縮まつていていた。

「あの……一つ聞いてもいいですか？」

「はい、何でしようか？」

私の宿泊先のホテルまで歩いて向かつていて、宮原さんがポツリと口にした。

「吉野さんは落ち込むことがあつたって言つてたので。何があつたのかな？ つて気になつてました」

「ああ、そのことなら、吹つ切れそうです。実は……買い付けに来る少し前に、結婚が秒読みだと思つて、彼氏に振られました」

「気まずい雰囲気にならないよう、私はわざと明るい声で笑いながら伝える。『そうだつたんですか！ デリカシーもなく、聞いてしまつてすみません！』」

申し訳なさそうな表情を浮かべながら、宮原さんは慌てて謝る。

「いえ、いいんです。ずっと鬱々うううしてましたが、宮原さんと一緒に大使館に行つたり食事をしたりしている間に落ち込む気持ちも薄れてくれましたから」

「少しでも気が紛れたならよかったです。日本に戻る頃には、もつと元気になれるようにフィンランドを楽しみましょうね！……って、吉野さんは仕事で来てるのにすみません！」

「仕事抜きで楽しんでは私の方ですよ。元彼のことなんて早いとこ忘れます」

「お互いに笑い合う中、ついに宿泊先のホテルの前についてしまった。」

「今日はありがとうございました！」

「こちらこそありがとうございました。それから、明日の連絡もありますし、連絡先を交換していただけますか？」

「はい、電話番号とメッセージアプリのIDを交換しましょう」

「私たちはお互いの連絡先を登録して、この日は別れた。」

「心の中に高鳴る鼓動と宮原さんの気遣いが残した穏やかな余韻を抱え、ホテルのドアを閉めた。明日も会えることが、何よりの楽しみになっていた。」

「冷たい風が街を吹き抜けていた昨晩、ベッドに入つても私はなかなか寝つけなかつた。」

「思い出すのは宮原さんのことばかりで、胸が高鳴つてしまつていてる。」

「彼の笑顔や優しい言葉が、頭の中をぐるぐる巡つてしまつ。」

「失恋したばかりなのに、宮原さんのことばかりを思い出す。それほど、彼は魅力的な男性なのだ。」

夜が明けてフィンランド二日目の朝。

寝不足のままで身支度をする。

鏡の前で自分の顔を見つめた。

疲れた目元が映つているけれど、それでも宮原さんに会えるのかと思うと、勝手に胸がキュンとしてしまつ。

彼と過ごす時間が特別になつていてる気がする。

「フィンランドで宮原さんと出会つてから、弘樹のことなど微塵みじんも思い出さなくなつていて。あなたに大好きだったのに、宮原さんによつてその存在が搔き消されてしまつていてる。」

「そういえば、私は弘樹のどんなところが好きだつたんだろう？」

「優しいといえば、そうだけれど……。」

「今思うと、見ないふりをしていただけで、元々意見の違いは多かつたかもしれない。」

「振られてしばらくは目を腫らすほど泣いてしまつたけれど、今ではもう泣かなくて済みそうだ。心の中が少しずつ軽くなつていくのを感じるのは、きっと宮原さんに出会つたからだよね？」

「好きとか嫌いとかいう感情ではなく、宮原さんの人柄が気になつていてる。一緒にいると落ち着くから。」

宿泊先のホテルのレストランで軽く朝食を済ませ、待ち合わせの時間まで部屋で待機する。窓の外には静かな街の景色が広がっている。

待ち合わせ場所は私の宿泊しているホテルの前。約束の時間まではまだ早いけれど、部屋に籠つていても落ち着かないで外に出ようと思った。

まだ十五分前だから、宮原さんは来ていないかも知れない。けれど、それでもよかつた。

そわそわして落ち着かない心を、外の新鮮な空気で少しでも和らげたい。

エレベーターのドアが開くと、冷たい空気が流れ込み、思わず身を震わせる。ホテルの外に出ると天気は曇りで、人々が忙しそうに行き交っていた。

「おはようございます、吉野さん。早めに来てしまい、ご迷惑かと思つたのですが……」

「え、あ、宮原さん！ お、おはようございます」

まさかこんなに早く会えるとは思つていなかつたので、しどろもどろになつてしまふ。

宮原さんは知らない土地に来たせいか昨晚は寝つけなくて、朝も早起きしてしまつたと恥ずかしそうに続けた。

「旅行が楽しみで子どもみたいにわくわくしそぎて……すみません」

彼のしゅんとした表情を見ると、親しみを感じる。

「ふふつ、私も初めての土地に行く時はそんな感じですよ。知らない国の方が早く知りたくて、

「やはり、日本より寒いですね……」

宮原さんがボソッと呟く。

彼は暖かそうなダウンジャケットを羽織っているが、昼間でも氷点下の気温に身震いしている。「実は私、東北生まれなんです。寒いのは慣れてるつもりだけど、やっぱり寒いものは寒いです！」私は笑いながら答える。

首元にマフラーを巻き、長めのコートにブーツを履いて防寒対策をしていても、寒さには勝てない。息が白くなるのを見ていると、フィンランドの冬の厳しさを改めて実感する。

寒空の下、手袋をしていても手先が冷たくなり、耳が痛むような寒さに、少しづつ足取りが重くなるが、隣に宮原さんがいるから頑張ろうと思える。

宮原さんと一緒に大通りの道沿いを進みながら歩く。

何度か訪れているので、街中の景色も見慣れてきた感じがする。

そして来るたびに親切にしてくれる大好きな雑貨店のご夫婦にもうすぐ会えるという、再会の瞬間を待ちわびる気持ちが込み上げてきた。

「あのお店です！」

私が指さすと、宮原さんも微笑んで頷く。

年に二回、買い付けに来ているこの街で、約半年前に出会ったご夫婦の顔が、心の中に鮮明に浮かんできた。

早く彼らの顔を見たくてしようがない。

「こんにち……」と言葉に出しながら店の扉を開いた瞬間、奥さんが私を見つけて、笑顔と共に飛び込んできて抱きしめてくる。

「わあ！ アカリ！ いらっしゃい！」

その声には温かさと半年ぶりの再会を心から喜ぶ気持ちが溢れていって、私は彼女の小さな身体をぎゅうっと抱きしめ返す。

「この方は？ もしかして、旦那様？ まあ、素敵な方ね。ちょっと、あなたー！ アカリが旦那様連れて来たー！」

奥さんの言葉は純粹な喜びに満ちていたが、完全な勘違いだ。

彼女はフィンランド語ではなく、私に合わせて英語で話してくれる。英語はとても流暢で、私たちの会話は自然とスムーズに進む。

「アカリ！ おめでとう！」

奥から店主の旦那さんが現れ、少しひこちないが心のこもった日本語で祝福を述べてくれた。彼の身体はがつしりとしているが、その表情にはどこか子どものような無邪気さが滲んでいた。

「ちょっと待って！ ち、違うの！ この人は宮原さんという方で、私を助けてくれて……」

急いで説明をしようとするが、動搖のせいでお手くまともならない。そんな私に宮原さんは、優しい視線を向けてくれる。

私の動搖した心は、少しづつ落ち着いていく。

「初めてまして、アカリさんの友人の宮原と申します。興味本位でアカリさんと一緒についてしまいまして、買い付けの様子を見せていただければと思います」

宮原さんは目の前にいるご夫婦の言葉にまったく動じることなく、淡々とした態度で英語を話し始めた。まるでどんな状況にも動じない強さを彼から感じる。

「まあ！ そうだったのね。アカリの旦那様かと思って舞い上がってしまったわ。ごめんなさい」

奥さんは勘違いしていたことを照れくさそうに謝つてくる。

宮原さんが出会った経緯を彼らに説明すると、二人はゆっくりと頷き、納得の表情を見せた。

その後、宮原さんと一緒に店内を見学し、私はじっくりと買い付ける商品を選んでいた。私はふとした瞬間に彼の後ろ姿を見つめてしまう。

「アカリ、彼、とてもハンサムね」

奥さんが私の耳元で囁く。

もしかして、宮原さんを目で追っていたのを気付かれたのかな？

彼女の声はまるで秘密を共有するかのように聞こえて、思わず心がドキリとした。

「一人、とてもいい雰囲気よ」

その言葉に動搖して、手から商品が滑り落ちそうになり、私は慌ててそれを掴み直した。

危ない、落ちなくてよかったです。

心臓が高鳴るのを感じつつ、宮原さんの姿をちらりと見ると、やはりどの角度から見ても彼はハンサムそのものだった。高身長で凛とした顔立ちが際立つていて、彼がただそこにいるだけで周囲が華やいで見える。

私が宮原さんのこと気になつていると、きっと奥さんは気付いているのだろう。

奥さんが茶化すような言葉を投げかけるたびに、私は変に意識をしてしまい、恥ずかしさが心の中でくすぐついていた。

「あ、これ、可愛い！」

宮原さんを視界に入れないので意識して、商品を見ながら私が目を輝かせて言う。

「それね、帽子は私が作ってる。可愛いでしょ？」

奥さんは優しい笑みを浮かべ、答えてくれた。

「すごく可愛い！ これ、納期はゆっくりでもいいからお願ひしたいなあ」

目の前にあるのは、木でできた起き上がりこぼしのような小さな人形。

色とりどりのどんがり帽子を被り、髪型がお下げの子もいて、その愛らしさに思わず笑みがこぼれた。

他にも色々と見せてもらひながら、仕入れるものを見んでいると、宮原さんも甥っ子と姪っ子にあげたいと、じつくりと商品を選んでいる姿が目に入つた。

彼の真剣な表情と、子どもたちへの思いが詰まつた選び方に心が温かくなる。

買い付け商品を選び終わり、私たちは雑貨店の外へ出た。

「アカリ、また夕方に来てね！ ミヤハラも一緒に！」

奥さんの声が歩道まで響き、明るい笑顔が私たちを見送る。

「はい、ありがとうございます。では、またのちほど伺います」

私は心を込めて返事をしながら、少し名残惜しく感じた。雑貨店を出ると、ひんやりとした空気が身体に纏わりつく。

このあと宮原さんと一緒にランチをしてから、クリスマスマーケットの準備状況を確認しに行くことにした。

それでも夕方までは時間が余っていたので、目新しい雑貨店を物色したり、家具店を覗いたりした。色とりどりの雑貨や、木のぬくもりを感じられる家具たちが、私の心を奪つて離さなかつた。

そして、ご夫婦が経営する雑貨店で夕飯をご馳走になつたあとのこと――

「俺まで、夕食をご馳走になつてしましました。わいわいとしたパーティみたいで楽しかつたですね」

宮原さんが楽しそうに言う。彼の笑顔が、食卓を開む幸せな時間を思い出させてくれる。

「私がお邪魔する時はいつも、お子さんたちの他に近所の人たちも来て賑やかなんです。ふふ、

宮原さんは子どもたちにも大人気でしたね」

私は微笑みながら返す。楽しそうなご夫婦と子どもたちの無邪気な笑い声が心に残つていて。

宮原さんの周りにはいつも人が集まるようで、彼の人柄がその場を和ませているのだろう。

「子どもたちと遊ぶのは、本当に楽しいですよ。無邪気な笑顔を見ると、こちらまで嬉しくなります」

宮原さんが少し照れくさそうに言う。

「明日と明後日も買い付けにご一緒してもいいですか？」

「もちろん、いいですよ。でも、明後日からはオフなんです」

明後まで買い付け巡りをして、明後日と明々後日は観光に充てようと決めていた。

「そうでしたか！ 明後日のご予定がなければ、オーロラを見に行きませんか？」

「……はい！ 是非」

前回、美緒と一緒に訪れた際にはオーロラを見ることができなかつた。

突然の誘いに驚きはしたが、自分自身もオーロラが見たいという想いがあり、躊躇なく承諾すると宮原さんは柔らかい微笑みを浮かべる。

彼の優しい笑顔を見ていると何だかほつとして、私も思わず笑顔になる。

私たちの間に流れる穏やかな空気が、まるで家族のような温もりを感じさせてくれた。

翌日、オーロラを見に行くため、買い付けを早めに切り上げた。その夜、宮原さんと一緒に夜行く列車に乗り、翌日の朝方にロヴァニアエミに着いた。

ロヴァニアエミはフィンランドの中で最もオーロラが見えやすい場所らしく、その美しさを求める

観光客で賑わっている。

夜行列車の寝台は満席で予約が取れず、リクライニングのシートに座つた私たち。隣にいる宮原さんの存在が、緊張感を一層高める。彼の隣に十二時間も座つてゐるなんて、夜間だけれど仮眠さえもできない。

列車の揺れが心地よく、ふと気が付くと宮原さんはいつの間にか寝てゐる。周りの乗客はまだ話しこんだりしてゐるが、宮原さんは深い眠りについているようで静かに寝息を立ててゐる。

宮原さんの穏やかな寝顔を見ていると、その美しさに心を奪われてしまう。起きないのをいいことに、あまりに見つめすぎて、彼が目を覚ましたらどうしよう。万が一に目が合つた瞬間を考えると、何だか恥ずかしさが胸を締めつける。

そんなことを考えているうちに、ますます彼をじつと見ていたい気持ちが強くなる。

しかし、私はその気持ちを押し殺して、到着してからの予定を考え始める。

朝の光が差し込むロヴァニアエミに降り立つたら、宮原さんと一緒にどんな観光を楽しもうか。まずは名所を巡り、夜にはオーロラを観賞する計画だ。

そういえば、明日の夜にヘルシンキに向かう列車はどうだつたつけ？ 飛行機にするのかな？

全くの思い付きのプランで、オーロラツアーレの予約も宮原さんにお願いしてしまつたから、私自身は何も考えていなかつたことに気付く。

彼が起きたら、確認してみなくちゃ。そんなことを考えながら、心は高鳴り続けていた。

列車の窓から差し込む光が、私を眠りから優しく覚ませた。

どうやらいつの間にか深い眠りに落ちていたらしい。

ぼんやりと目を開けると、隣の宮原さんは既に目を覚まし、静かに文庫本を読んでいる。

「おはようございます。もうすぐ朝食が届くみたいですよ」

私が起きたことに気付いた宮原さんは、優しく声をかけてくれて文庫本を閉じた。その声は心地よく、安心感をもたらす。

しかし、夢の中の記憶が微かに蘇り^{よみがえ}、口を開けていたり、ヨダレが垂れたことはないだろうかと不安がよぎる。

普段はイビキをかかないが、時差もあって疲れが溜まっているので、どうだつたか……

宮原さんの顔をまともに見られないまま、少し気掛かりになる。

「せっかくヘルシンキから遠出したので、観光しながらここでも仕入れ商品を見ていくのはどうですか？ オーロラを見るのは夜なので」

「そうですね。ありがとうございます」

美しい景色や新しい発見が待っていると思うだけでわくわくする。

「ミステリー小説が好きなんですか？」

気になつたので、思わず聞いてしまつた。

宮原さんが持つている文庫本は、今話題の新人作家のものだ。私はタイトルだけ知つていて読んだことはないのだけれど、たくさんの人人が心を掴まれ、夢中になつてているらしい。

「はい。犯人を予想しながら読んで、当たつた時は最高に嬉しいです」

宮原さんの目がキラリと輝く。彼の表情には人柄が滲み出ているようで、私も思わず笑顔になつてしまつた。やり取りをしている中のこういう瞬間が、旅の楽しさを一層引き立てているのだと感じる。

少しずつ、宮原さんを知っていくことができて嬉しい。

駅についてからは近場のカフェで時間を潰し、ゆつたりとした空気の中で宮原さんとの会話を楽しんだ。

その後、わくわくするような期待感を抱えながら、十時頃にサンタクロース村へと向かう。

ショッピングモールで色々と物色する時間も楽しかつた。宮原さんが選ぶアイテムに興味を持ちながら、自分の好きなものも見つけていく。

そんな時、宮原さんがオーロラが綺麗に見えるホテルを予約してくれていたことを思い出す。何かとお世話になりっぱなしで、彼の心遣いに感謝の気持ちが溢れてくる。

夜、部屋は別々に取つてくれたものの、ルームサービスと一緒に食べるため宮原さんの客室にお邪魔した。

食べ終えたあとも、雑談をするために私は居残つている。

「思い立つて行動したのはいいですが、あいにくの悪天候ですみません」

「いえ、誘つてくださり嬉しかつたですよ。それにほら、まだ夜明け前に見られる希望が残つてますから」

オーロラを見るためには、天気が良くて空気が澄んでいなければならぬ。昼間は晴れていたのに、雲行きは怪しくなり、夜九時頃にはオーロラを見ることができなかつた。

しかし、宮原さんの情報によると、夜中には天気が回復し、午前三時頃にはオーロラの光が強くなるという。期待に胸を膨らませる。

「そう仰つていただけてよかつた。俺はいつも、後先考えず行動しちやうので……外交官としても、もつと冷静にならぬといけないのですが……」

「そんなことないですよ。宮原さんは咲咲の判断ができる、素敵なお方です。現に私のことを空港で助けてくれたじゃないですか！」

私は思わず身を乗り出し、そう言つた。

お互いの信頼感が深まっていくのを感じながら、この旅での思い出が一層特別なものになる予感がした。

「困つてゐる人を助けたいという気持ちもありましたが……それとは別に……いえ、何でもないです」

宮原さんが言葉を濁した瞬間、心の中で何かが弾けた。

頬が赤らみ、照れたように目を伏せた。そんな彼の姿に、私は一瞬ドキリとします。

宮原さんの可愛らしい反応を見た私は、これ以上に惹かれてしまいそうになる。

けれど、失恋したばかりなのに、このまま彼に惹かれてしまうのは早すぎないだろうか……

「ごめんなさい、すごく気になります。それとは別に？ 何か教えてはもらえませんか？」

私は、湧き上がる好奇心を抑えきれずに問いかける。聞いたからといって、どうこうというわけではないのだけれど、何故だか知りたい気持ちでいっぱいになる。

ビールを飲みながら、二人の間には和やかな雰囲気が流れていったが、少し酔いが回つた私は我慢できずに詰め寄つた。

ほろ酔い気分で心が開放的になつてゐるのだろうか？ 思つたことをそのまま口に出してしまう。

「言いくらいことなんですが……」と、宮原さんは私の方をチラリと見ながら、深呼吸をした。私もドキドキしながら彼の言葉を待つ。

「初めてお会いした時から、可愛いなと思つてました。要するに一目惚れつてやつでしようか」

その言葉を聞いた瞬間、私の心は一気に高鳴つた。

彼の真剣な眼差しが私に向けられ、言い終えたあとにふふっと笑つた姿が、ますます愛おしく感じられる。

驚いて目を丸くしてしまう。

宮原さんが私のことを可愛いと思つていてくれたなんて……

「あの時、吉野さんじやなくて、別な方だつたとしても助けようと思つた気持ちに変わりないと思ふんです。でも、自分が一人旅だからつて相手の方の行き先に同行しようなんて、普段なら思わないで。吉野さんだからついたい気になつてしまつたというか……あー、何を言つてるんでしょうね。すみません！ ちょっと、火照りを冷やすために顔を洗つて来ようかな」

宮原さんは慌てて席を立ち、洗面所に向かつた。

どうしよう？

ドキドキして、胸が苦しい。

宮原さんは洗面所で顔を洗つてきたようだけれど、頬はまだほんのり赤いままだ。お酒のせいか、さつきのやり取りのせいか、どちらなのか分からぬ。

「大丈夫ですか？」と声をかけると、彼は少し照れ笑いを浮かべて「はい、なんとか……」と答える。

しばらく沈黙が流れる。

でも、気まずさではなく、不思議と心地よい静けさだった。二人の間に生まれた温かな感情の余韻が、静かに広がっていく。

このまま黙っているのも変だよね？

やつと、私は意を決して口を開いた。

「私、私も、同じです！ 宮原さんのことが気になってしましました。でも、彼氏に振られたばかりで落ち込んでいたはずなのにおかしいかな？ とか考えてばかりで……」

無我夢中になつて、私は自分の想いをぶつけていた。

元彼の存在なんて、もうどこか遠くへ消えてしまった。

ただ、今は宮原さんとの時間が大切で、帰国したら会えなくなるかもしれないという不安が心を締めつける。

こんなに誰かと離れたくないと願う自分がいるなんて、思つてもみなかつた。

どうしよう……と、つい声に出してしまいそうになる。

胸の奥から、止めどなく想いが溢れ出そうで、苦しいくらいだ。

でもそれでもいい。素直な気持ちを伝えたい。この一瞬を、大切にしたい。

唇が僅かに震える——だけど、もう迷わない、と自分に言い聞かせる。

「お互いに同じ気持ちだったんですね」

宮原さんは、私の目をじっと見つめる。この瞬間、心の中の不安が消え、じんわりと温かな気持ちが広がっていく。

「出会つてから、たつたの何日間ですが、こんなにも愛しいと思える女性に初めて出会いました。帰国してからも会つてもらえますか？」

彼の真剣な表情が、ますます私を惹きつける。

「え？」

私は突然の誘いに動搖してしまう。

宮原さんに誘われたのは嬉しいけれど、戸惑つてしまう。

友達としてなら、いいのかな？ でも、私は友達として気になつてゐるわけじゃないから——

そんな複雑な気持ちが胸の中で渦巻く。

彼の優しさや、今まで見させてくれた誠実さを思い出すほど、素直に答えたくなる自分がいる。でも、もし期待しすぎてしまつたら、もし違う意味だつたら……と考えると傷つくなるのが怖くなる。

それに失恋したばかりなのに、一時的な感情に流される軽い女だと思われないかな？

「宮原さん……私、友達と思つていらないんです。もっと、特別な存在になりたいって。でも……」

言葉を紡ぎながら、無意識に手を膝の上できゅつと握りしめる。彼の視線が真っ直ぐに私を捉えていて、逃げ場なんてどこにもない。

「でも、……何？」

宮原さんの優しい問いに、私は勇気を振り絞つて言葉を続けた。

「それは、えつと……失恋したばかりなのに、宮原さんをすぐに好きになるなんて変じやないですか？」

胸の内を明かすことが不安で、声が少しだけ震えてしまう。

自分の気持ちに正直になりたいけれど、戸惑いも消せない。

「いや、そんなことはないよ。俺だって、会つたばかりなのに吉野さんが気になつて仕方ないんだから」

その言葉を聞いた瞬間、心に絡んでいた迷いが少しずつほどけていく気がした。

目を合わせると、宮原さんの瞳はまるで私だけを映しているような気がした。

彼の真っ直ぐな気持ちに、胸の奥がじんわり温かくなる。

「人を好きになるのに時間なんて関係ない。要はファーリングの問題でしょ？ 俺は吉野さんの

ことが、可愛いところだけじゃなくて、明るい性格も人懐っこい笑顔も、全部大好き。これからももつと、吉野さんのことを知つていきたいんだ」

宮原さんの気持ちが、私の心にある壁を崩していく。

私はそつと息を吸い込んでから、想いを重ねた。

「本当は、私も……同じように思つています。過ごした時間じゃなくて、これからを大切にしていければいいんですよね？」

ほんのりと涙がにじみそうになるのを堪えながら、私は宮原さんを見つめた。

彼が優しく微笑み、そつと手を伸ばして私の手を包み込む。その温もりが、不安も戸惑いも全て溶かしていくようだつた。

「そうだよ。帰国してもよろしくお願ひします」

お互にそう言い合い、再び見つめ合つた時、宮原さんが私の背中を抱きしめた。

「もちろん！ こちらこそ、よろしくお願ひします」

私も宮原さんの背中に両腕を伸ばして、ぎゅっと抱きしめ返す。彼の身体から伝わる熱と、その存在そのものに安心感を覚え、この瞬間が永遠に続いてほしいと心から願う。

「吉野さんはこんなにも可愛いのに、結婚をチラつかせた挙げ句に振るだなんて、元彼さんは最低な男ですね」

宮原さんは私を抱きしめたまま、愛おしそうに私の後頭部を優しく撫でてきた。

彼の大きな手が心地よくて、安心する。

「俺なら、一生手放さない。吉野さんといるこの数日が本当に楽しくて、離れたくないんだ。女性をこんなにも好きになることは今までなかつた」

宮原さんの言葉が胸の奥に響いていく。私も宮原さんと同じ気持ちなんだ、心の中で叫びたくなる。短い期間で、こんなにも惹かれてしまうなんて――

「吉野さんが好きだ」

宮原さんの言葉がすんなりと耳に入つてくる。私は顔を上げて、彼の目を見つめた。そこには真剣な眼差しがあり、私の心を強く捉える。

「私も……好きです」

自然と口から出た言葉は、彼への想いそのものだつた。

二人の距離が縮まつていく。

宮原さんの顔が近づいてきて、私はそつと目を閉じた。心が通じ合う瞬間に唇が重なり、世界が静止したかのようと思えた。

私の胸はトクン、トクンと高鳴り始める。

「このまま、吉野さんを抱きたい」

何度か触れるだけのキスをしたあと、私は自然とソファーに押し倒されていた。見上げると、そこには宮原さんの綺麗な顔がある。

「いい、ですか？」

私は胸を高鳴らせ、恥ずかしさから視線を外して頷く。

「絶対に一夜限りとか、遊びじゃないですかね。約束します」

宮原さんはそう言うと、自分の方に私の顔を向けて再びキスをしてくる。

「……んつ」

半開きになつた私の口の中に、宮原さんの舌が侵入してくる。私の舌先に触れ、絡ませてきた。普段の優しい姿とは違い、唇を貪るような荒々しいキスをされる。

いきなりこんな展開になるなんて、微塵も想像していなかつた。

唇を重ねてしまつたのは、私の気持ちが宮原さんに傾いていたからだけど、本当にこれでいいんだろうか――

宮原さんはもつと硬派な人だと思つていて、油断していた自分もいる。

展開的に、結ばれるのはまだ早すぎるかな……

宮原さんの言葉は誠実で、遊びじゃないと約束してくれた。でも、出会つてからの時間や、キスの余韻が強すぎて、自分の気持ちが追いついていない気もする。

どうしよう、このまま関係を進めてしまつてもいいの？ それとも、もう少しだけ立ち止まるべき？

迷いながらも、体は宮原さんの優しさに安心してしまつていて。

「あ、あの……！ 宮原さん、ちょっとだけ、待つてもらつてもいいですか？」

唇が離れた時、私はそつと宮原さんの腕に触れて声を掛けた。

一瞬、部屋に静けさが戻り、私の声が薄暗い空間に漂つた。

我に返った宮原さんは少し慌てた様子で、私の肩をそつと包む。

「無理はしてほしくないし、吉野さんの気持ちが一番大切なよ。焦らず、ゆっくりでいいから」優しく囁いてくれた言葉に、胸の奥がじんわりと温かくなつた。

「もし、今日はまだ早いなと吉野さんが思つてゐるなら……今ならまだ止められるよ」

私は思わず唇を噛んだ。

確かにほんの少し寂しい気持ちはあり、それは否定できない。でも、正直に伝えるのは何となく照れくさくて、視線を逸らしてしまつ。

「そ……そんなことないです」

声が掠れてしまい、説得力に欠けていた。

宮原さんは、私の頬にかかる髪を優しく耳にかけてくれる。

「無理に強がらなくともいいよ。でも、今日はちゃんと距離を守るから。吉野さんが安心して眠れるように、ソファーで寝るよ。吉野さんが寝つくまで、傍にはいるから」

胸の中のもやもやが少し溶けていく。けれど、心の奥にぽつかりと小さな穴が開いたような、そんな感覚も残つたままだ。

「……ありがとうございます、宮原さん」

そう呟くと、宮原さんは満足そうに頷いた。それでも、心のどこかで、もう少しだけ一緒にいたいと願つてしまふ自分がいる。その気持ちに戸惑いながらも、私は宮原さんの優しさに心を委ねた。

「さて、そろそろ寝ますか」

「え……！」

宮原さんは、私のことを軽々と抱き上げた。

「ベッドに移動しよう」

私はお姫様抱っこをされているのが恥ずかしくて、俯いてしまう。ゆっくりと、壊れ物を扱うかのようにそつとベッドに降ろされる。

「おやすみ」

宮原さんはチユツと私の額にキスを落とすと、戻ろうとした。

「え？ 吉野さん？」

私は思わず、宮原さんの腕を掴んでいた。

「あの……！ 眠るまでは傍にいてくれると言つてましたよね？」

「……はい」

宮原さんは、きよとんとした顔で私を見下ろす。

「じゃあ、まだ傍にいてください」

私は、約束が違うと駄々をこねる子どもみたいに我儘を言つた。

「まいつたな……吉野さんは聞き分けのいい方だと思つてたのに」

宮原さんは溜息をつく。

「いいですか？ 僕は吉野さんが思つてゐるような、優しいだけの男性ではありません。眼るまで

傍にいるなんて嘘です」

「え？」

一瞬、部屋の空気が凍りついた気がした。けれど宮原さんは、苦笑いを浮かべて私の頭を優しく撫でる。

「本当は、吉野さんの隣にずっといたいと思つてます。でも、傍にいたら理性を保てる気がしないんですよ。だから、今日は傍にはいられません」

私はそつと宮原さんの袖を掴んだまま、頬を赤らめる。

「……ずっと、隣にいてください」

囁くように伝えると、宮原さんは私の手を包み込むように握ってくれる。その温もりに、どこか不安だった心が和らいでいくのを感じた。

「隣で……一緒に寝てほしい」

「いいの？ 今、隣に寝ることは危険だけど」

宮原さんの言葉に、私は素直に頷いた。

私も心のどこかで、宮原さんと身体を重ねたいと思つていたのかかもしれない。

さつきキスのあとで止めたのも、気持ちが追いついていないというのは嘘で、自分の本当の気持ちをこまかすための建て前だったのかもしれない。

こんなにも誰かを強く求めるなんて、宮原さんが初めてだ。

元彼のことなんて、もうどうでもいい。

理性なんてなくていい。
私は宮原さんだけを求めている――

「今度こそ、止められないからね？」

宮原さんが右膝をベッドに乗せて、私に迫つてくる。宮原さんの手が私の頭をそつと撫でて、優しく微笑む。その表情に、少しずつ不安が溶けていくのを感じた。

宮原さんの右手は、次第にトップスを捲り上げてくる。フインランドは寒いので厚手のセーターを着ていたが、脱がされない今までブラジャーのホックを外された。

「あっ、ん……！」

両方の乳房が露わになり、宮原さんの舌先が突起に触れる。
突起を舌で優しく転がされると、甘い声が出てしまう。

「吉野さんは敏感なんだね」

クスッと笑う宮原さんに抵抗して、「そ、そんなことないですか……！」と否定した。

「じゃあ、これからじっくり、俺だけに吉野さんの可愛い顔を見せてくれる？」
「わ、……あ！」

恥ずかしさで顔が熱くなつたけれど、それ以上に彼が私を愛おしんでくれていることが伝わつて、胸が苦しいほどに幸せだった。

「バンザイして。セーターを脱がせたいから」